

# 幻の「農村歌舞伎」は今 稀有な史料から歴史的意義を再発掘



篠路歌舞伎保存会の幼稚園児の「白波五人男」（令和元年10月）



高尾 英男（たかお ひでお）

北海道に入植した開拓者たちは開墾と農耕に余念がなく文化活動は盛んでなかったと言われていますが、農村歌舞伎の座が多くありました。明治中期から昭和初期にかけ活動し、解散して人々から忘れ去られ、幻と言われています。最近、その全体像が明らかになりました。

私が農村歌舞伎を知ったきっかけは、全道一円の郷土資料館を調査していたところ、各地で関連史料を見たことです。困難をきわめた開拓期に心の豊かさが伝わる史料を発見し、後世に残したいと考えたのです。

なお、農村歌舞伎は農村で素人の農民や地元民が演じるものを言い、地域住民が演じる地歌舞伎（地芝居）の一つのジャンルです。農村歌舞伎の顛末から述べます。

## 幻からおもてに

北海道の農村歌舞伎が注目されたのは昭和34年のことです。道内で唯一残っていた佐呂間町の柘木歌舞伎をNHK札幌放送局がフィルムに収録し放送、それを見て現地を訪ねた東京の歌舞伎研究者の大学教授が、演技技術の高さに驚嘆したと伝えられています。この座は翌年解散します。時を経た昭和48年、開道百年記念で北海道教育委員会が刊行した「北海道演劇史稿」に、旧篠路村烈々布（札幌市北区百合が原）で回り舞台のある芝居小屋をつくり、座長の功績をたたえて記念碑も建立され、地芝居ではまれな事例と紹介されています。その後、札幌市北区新琴似、豊浦町新山梨と山梨、本別町勇足など、平成30年には20の座が明らかになっています。

私の研究の一つは『農村歌舞伎の興亡に与えた村落の形成と営農』で、複数県からの入植者により座が形成され村落は結束したが、作物作付けの変動が座の興亡に影響を与えたことです。もう一つは『開拓期における農村歌舞伎の研究史ノート』で、先達者の研究成果を時系列的にまとめました。

本道には、技術ある入植者が移住の荷物に台本などを入れて渡道した場合、また、台本の持ち込みや技術はないまま渡道し座を結成した場合の二通りで伝わりました。座のほとんどは当初から歌舞伎でした。中には新劇や浄瑠璃から移行したものもありますが、解散したのち芸は伝承されていません。

20の座は道央圏13、道北圏2、道東圏5にあり、多くは交通が不便な娯楽の乏しい村落で結成され、座員

は50名前後と多く、一県出身者よりも複数県の出身者の座の方が多く見られます。民間人による団体入植地がほとんどで、屯田などの官製開拓では、士族移住地が1座ありました。地元神社の祭典の余興で、野天に丸太とムシロの仮設舞台にて演じられ、時には他のまちで商業興行をしています。座の存続期間は10～25カ年で、最長は栃木歌舞伎の昭和35年までの50カ年です。観客からの祝儀（花＝投げ銭）は、活動経費に充てられ、また、同じ農村歌舞伎でも商業興行の座は、祭典余興の座に比べ存続期間は短くなっています。これらから当時の農村の経済状況を知ることができます。

### 農村歌舞伎の史料は今

農村歌舞伎の史料には、座長の回想録は極めて少なく、市町村史での記載は7座、部落（地域）史では5座と少ない上に詳述されていません。しかし、史料が郷土資料館に展示されているのが6座あり、この座の顛末は次のとおりです。

新琴似歌舞伎は「プラザ新琴似」（札幌市北区）のロビーに展示があります。座は明治30年頃から神社で上演、43年に座長が自前の芝居小屋をつくり商業興行するものの行き詰まり、大正5年に解散しました。平成8年に伝承会が復活上演し、今は毎年、中学生が演じています。

篠路歌舞伎は「烈々布郷土資料館」に展示がありますが、大分部は「篠路コミュニティーセンター」のロビーに移され展示されています。烈々布では、水害が常襲し青年たちの心がすさみ賭博に走るのを憂いて、明治35年に座が結成されました。座長の大沼三四郎は、周辺村落から青年を誘って指導、先述の回り舞台をつくりましたが、昭和9年に解散。丘珠の元座員が新派劇団を結成して、苗穂の都市勤労者の劇団をも指導し、地域の演劇に影響を与えました。平成に入り保存会が子供歌舞伎で復活上演、足跡を伝えています。

北竜歌舞伎は「北竜町郷土資料館」で展示されています。冬に自宅や納屋で阿波浄瑠璃を口演、明治40年頃に仮設舞台をつくり上演されました。農村歌舞伎の原型と言えます。

「北海道博物館」に豊浦町の山梨歌舞伎の台本が保存されています。山梨と新山梨は明治末に団体入植しました。山梨県は地歌舞伎が盛んな県で、新山梨では、晴天なのに稽古をしていたのを、開拓団幹部から木を

切り倒すのが先だと厳しく注意され、後に座の幹部ら10名が一斉に離村して停滞します。しかし、行商人の指導を受けて他県出身者で再出発しました。保存の台本以外の史料は散逸しています。

勇足歌舞伎は「本別町歴史民俗資料館」で展示されています。勇足へは浄瑠璃が盛んな徳島県から入植し、早々に愛好者たちが自宅などで口演、入植して23年が過ぎた大正9年頃に歌舞伎に移行しました。出荷後に空いた穀物倉庫で稽古し、神社の余興で夜明けまで上演したと伝えられています。

栃木歌舞伎は「佐呂間町開拓資料館」で展示されています。座長の川島平助は、わが国初の公害闘争として有名な足尾鉍毒事件の栃木県谷中村に生まれます。東京に出て歌舞伎を修業し役者免状を得て帰郷しました。ところが、鉍毒防止の渡良瀬遊水地建設のため、土地家屋が強制収用されて廃村になり、明治末に団体入植します。直ぐに帰郷運動を巡り村落で対立が起き、川島は除名（村八分）されました。その後解除されて座を結成し、大正2年から神社の余興で上演しました。川島は野良で女形の歩き方で草を取るよう座員を指導したといえます。たびたび冷害に遭遇しますが変わらず上演し部落民を慰労しました。昭和35年の入植五十年記念式典で、自らが録音した浄瑠璃での一人芝居が最後になり、翌年没します。川島の一生は農村歌舞伎人生と言えます。

### 史料を後世につなぐために

史料の歴史的意義と保存展示について述べます。座があったのは民間人の団体入植地です。栃木団体の除名や新山梨の幹部による開墾の督励などは、明治25年に創設された団体（決）移住制の団体規約によるもので、農村歌舞伎は開拓制度の影響を受けた民衆史と言えます。

また、栃木歌舞伎の台本の表紙には、戦前の「諸興行取締規則」による警察署長の検印のある貴重な史料があります。しかし、他では史料が保存されているものの休館している館があり、将来、史料の逸失がないよう的確な保存が求められます。

農村歌舞伎の全体像が明らかになってまだ日が浅く、解明すべき点が多くありますが、当面、研究成果を一冊に集積して、歴史的意義を見つめ直すことが必要だと考えています。

1943年北海道生まれ。66年北海道道立農業技術講習所修了、北海道開発局入局、2001年退職、公益法人・民間会社勤務後退職。共著「記念碑に見る北海道農業の軌跡」「北の大地に挑む農業教育の軌跡」。単著「農業開拓史料収蔵施設ガイド」を電子出版、月刊誌に「開拓館をめぐる旅」を連載。現在、開拓史研究諸団体に属し成果を発表。開拓メモリアルの会代表。技術士（農業部門）。